

# 平成25年新年のご挨拶



(一社) 全国土木施工管理技士会連合会会長 小林 康昭

謹んで新春のお慶びを申し上げます。平素から連合会の活動に対しまして、全国の各土木施工管理技士会の皆様方からいただいておりますご協力とご理解に、心から感謝を申し上げます。

当連合会は、1992（平成4）年2月27日に当時の建設大臣から法人設立許可を得て発足し、旧年2月27日に、創立20周年目を迎えました。そして去る5月28日、東京都内市ヶ谷のアルカディアにおきまして、目出度く設立20周年記念式典を挙行することができました。ご出席いただいた方々、記念事業にご協力くださった方々には、厚くお礼を申し上げます。

一昨年3月11日に発生した東日本大震災は、未だに癒しきることがない大きな不幸をわが国に見舞いました。今もなおその傷跡を癒すことが出来ない被災者の方々には、快癒回復に努められますようお願いしてやみません。また、今も依然として、復旧復興に取り組んでおられる関係者の方々のご尽力に対しまして、敬意を表する次第であります。

近年、わが国の社会基盤整備の世界では、いわゆる経済性、採算性、効率性を重視する傾向が感じられる時代になっておりました。そうした機運の中で遭遇したのが、東日本大震災であった様に思います。そしてこの体験は、社会基盤整備の在り方を問い直したように感じられます。社会資本整備事業の多くを担う公共事業は、国民の生活と公共の福祉に益する施設を建設、運用、管理する事業でありますから、短期的な採算性や効率性の

尺度で成果を測ることは出来ません。それ故に、目先にこだわることを戒める認識が求められていると思います。

大震災発生に遡ること数年前、半農半漁の小自治体が海浜に津波避難塔を竣工させた際に、その首長さんは「役に立って欲しくない」と挨拶したそうです。その挨拶に、誰もが自然の脅威と公共事業の価値を痛感した、と言うことです。民間事業なら、役に立つことを望まない事業は、絶対に陽の目を見ません。これこそ、公共事業の真髄だと思えます。公共事業の中で特に重要な土木工事を担っている私ども土木施工管理技士は、その役割と責務について、改めて認識を新たにしたいと思えます。

こうした時代を背景にして連合会は、今まで以上に会員の方々にとって有益な活動に務めたいと思っております。連合会活動の中核に育ってきたCPDSは、発注機関が調達制度に取り入れる様になった事情も幸いして、年々、活動域が広がってきておりますが、更に加えて、多様且つ多面的な活動の輪を拡げて、会員の方々の技術の向上や啓蒙に向けた努力を重ねて参りたいと念じております。

今後とも、全国土木施工管理技士会連合会に対しまして、倍旧のご支援とご鞭撻を皆様方をお願い申し上げます。最後になりましたが、本年が会員各位にとりまして、より良く幸せな年になりますようにお祈りいたしまして、新年のご挨拶といたします。